

## 左右田ゼミと文化主義

渡植彦太郎は、一八九九（明治三十二）年東京市日本橋区小網町に生まれた。幼名を秀太郎という。父の初代彦太郎は、芝の町名主の次男でもともと伊藤という姓であった。

父は東京で一流の紙問屋に見習奉公して腕をみがき、「渡植」という紙問屋の株を買って独立し、日本橋に店を構えた。

母のエイは、問屋の並ぶ日本橋の商人の娘で、江戸の下町文化がまだいろ濃く残る町中で育った。いつもお歯黒をし、家の中はおひきづり、往来ではつまをとって歩くという風情の女性だった。二人の間には八人の子ができたが、そのうち七人が女で、秀太郎は待望の男子だった。

初代彦太郎は、紙屋の神様といわれた人物で、日本橋の店は五軒構えの大きな紙問屋であった。秀太郎が四歳のとき、紀州から沈没しかけの紙の運搬船が芝浦についた。父は海水をかぶった紙を船ごと買い入れ、日夜、紙の手当てをしたが、このときの疲労がもとで病没。秀太郎は父の彦太郎を襲名し、紙問屋の後継ぎとして育てられた。

母のエイは芸事が好きで、夜になると奥屋敷から三味線の音が流れ、長唄の声音のたえることはなかった。彦太郎が中学に入ると、エイは必ず月に二回、家族をつれて歌舞伎を観にでかけた。十五代目の羽左衛門、梅幸が全盛の時代であった。

家の近くには江戸前の寿司屋が並ぶ魚河岸があり、材木河岸や向島の吉原も近い。四の日、五の日、八の日といった縁日には、彦太郎は店の奉公人につれられて屋台をひやかして歩いた。浅草の年の市や下町の草市は家の者とでかけた。年の市では、帰りに人形町の「藪」で、蕎麦を食べるのが恒例であった。

彦太郎は父のことを憶えていない。家人は彦太郎の誕生日になると、さる高名な日本画家が描いたしょうき鍾馗の掛け軸を床に飾った。それは父が長男の誕生を祝って買ったもので、彦太郎にとって父をしの偲ぶ唯一の品であった。



小学校を優等生で卒業した彦太郎は、府立一中へ進学した。一中は当時、東京中の秀才の集まる場所であったが、入学してみると彦太郎はすぐに級長に指名された。勉強しないで遊んでばかりいると、たちまち成績は半分ぐらいにまでさがった。それで、二年になってちょっと勉強をするとまた成績があがり級長になった。途端に馬鹿馬鹿しくなり、かれは以後結果をめざして努力する

ことを卑下するようになった。

中学時代に彦太郎が熱中したのは、水泳と陸上競技である。陸上では当時百ヤードの日本記録が十秒五分の三であったが、彦太郎は十一秒フラットの記録をもっていた。一高の陸上部から誘いがあった。が、根っから商人になるつもりでいた彦太郎は大正七年、東京高等商業学校（現一橋大学）へ進学した。

高商の予科の時代、渡植は相変わらず勉強をしない学生であった。学校ではもっぱら水泳に熱中し、夏の間は伊豆の静浦へ師範としてでかけ合宿生活を愉しんだ。そして学校の外では女義太夫に凝り、役者の<sup>こわいろ</sup>声色を使うことにも腕をあげ、友人を誘って色街へ流しにいこうとしたが、さすがにこれは実現しなかったという。

このように日本橋の<sup>おおだな</sup>大店の若旦那として育った渡植は、遊蕩の味を知りつくした粋な江戸っ子らしい青春をもつが、この経験は渡植にとっておのずと日本の伝統文化への理解と感性を磨き、また様々な分野の職人たちの生活文化を知ることと、資本制商品会社の非文化性を見抜く資質を<sup>つちか</sup>培ったといえる。

渡植が学問に興味をもちはじめたのは、大学の本科へ入ってからであった。

二年のときに、学習院の教授だった天野貞祐が商科大学の講師として哲学史を講ずるかたわら、左右田博士のプロゼミを受け持っていることを知り、渡植は大学へ無理をいって天野ゼミを開講してもらい、ただ一人のゼミ生となった。ドイツの哲学書を解読する力では日本一流の学者を独占する幸運に恵まれた渡植は、得意にしていたフランス語をあっさり捨て、日に十時間以上もドイツ語の字引と格闘し、半年経つと哲学書がなんとか読めるようになった。それからさらに半年後、渡植のドイツ語の力を認めてくれるようになった天野が外遊することになり、渡植は左右田ゼミに入ることを許された。

渡植が恩師と仰ぐようになる左右田喜一郎は、「文化主義」の提唱者であった。

左右田は明治三十七年から大正二年まで九年間、主としてドイツに留学して研究生を送ったあと、日本文化の近代化にたいして、いささかの使命を覚えて帰朝した。

左右田は先代の跡をついで左右田銀行の頭取に就任し、関連会社の経営にもかかわるかたわら、高商と京都帝大の講師を勤めている。かれは学生にたいし



天野 貞祐

て、文化価値の実現をめざして努力することこそ人生を意義あるものにするとしてやまなかった。

左右田の提唱する「文化主義」は、かれが永年の滞欧生活のなかで体得した新カント派の理想主義を日本の精神文化にいかそうとしたものだったが、現実の運動としては西欧文化の単なる模倣に終始し、形而上学的な高まりをみせることはついになかった。

わけでも関東大震災以降、文化住宅がその好例のごとく、文化主義は西欧生活の物真似を意味する標語に墮していった。

左右田ゼミには、本多謙三を筆頭に学内でもとびきりの秀才が集まっていた。しかし左右田はどちらかといえば、超一流の頭脳のもち主よりは、自分のような凡才の指導に熱心であったと渡植は自伝的な回想の「学問放浪記」に書いている。左右田は公私ともどもゼミ生の面倒見がよく、一流の学者との会食に学生を陪席させることがよくあった。

左右田は学内ではいつも紋付の羽織と袴であった。ところが、大震災で莫大な蔵書や家財を焼失した左右田が、久しく休講していた講義に「西洋の法被」だといって洋服をつけてくるようになった。震災後の街はひどく歩きにくくなっていた。

洋服姿の左右田が講義の終わりにつぎのようなことを問いかけた。

「地震によって、自然の人間にたいする優越を人に感ぜしめるのはなぜであろうか。われわれが何よりも価値をおく文化とかテレオロギイ（目的論）とかいうことは、単なるものの観方以上の何ものでもないのだろうか」

左右田の問いにみなおし黙って、応えるものはなかった。左右田はこのときから四年後の昭和二年八月、病が悪化し不帰の人となった。同年に発行された雑誌『思想』の「左右田喜一郎博士追悼録」には、西田幾多郎、田邊元、井上準之助ら十一人の追悼文が載せられている。

このなかで本多は恩師を偲びつつ、先にあげた左右田の言葉を記し、「今先生の死に遭って同じような問が再び頭に浮かんで来るのをどうする事もできない」と結んでいる。一方、本多のあとにつづく渡植の弔文はその末尾で、「自らの体力を信ずる事厚かった先生は、臨終に迫っ



左右田 喜一郎

て猶、其の最後の到る事を悟られなかったと聞く。曾て形而上学的、哲学の悟りも所詮老婆の死際の南無阿彌陀佛と選ぶ所無しと喝破された先生は、最後迄この強気の人生観を持されたであろうか」と書いた。いずれにしる、この時代の超一流の知性の苦悩に、やがて無二の親友になる二人の若い感性はそれなり

に敏感であった。

ところで、渡植は大正十二年七月、本科の学生時代に向島のお茶屋の娘の石黒善と結婚する。善は東京女子師範学校（現お茶の水大学）出の才媛で、気ぐらいの高い女性であった。

石黒家では子女の教育のため本郷に別邸をもっていたが、使用人と四人姉妹だけのその家に、彦太郎は水泳部の後輩の誘いでよく顔を出すようになった。お目当ては石黒家の姉妹だった。

長姉の善は利発で器量も申し分なかった。学生の渡植にとって、彼女は話相手としては愉快で魅力ある女性だった。しかし、結婚は念頭になかった。女姉妹に囲まれて育った善の方が結婚を意識して交際しているようである。彼女が誘うような形で、二人は結婚の口約束をしたといわれている。

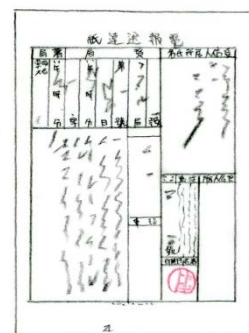
すでに渡植家では長姉が婿をとって家業をついでいたから、彦太郎は家の心配もなく学問の道へすすむことになっていた。善との結婚のことを母のエイに相談すると、格別の反対もなく、谷中に新居も用意してくれることになった。

しかし、いざ一緒に所帯をもつという段になって彦太郎はひどく面倒臭くなった。かれは善といるより、本多と過ごす時間のほうが充実していることに気づいていた。

彦太郎は善のところへでかけ、穏便に婚約の破棄をつけて帰った。善はしょげる様子もなく平然としていた。

ところが三日間、彦太郎の元へ電文が届いた。

「ヨシ、ドゾウニハイッタママ、ショクジトラズ、イノチシンパイ」



彦太郎は十蔵の窓越しに、やむなく求愛の手紙を投げ入れた。

大正十三年三月、本多と共に大学を卒えた渡植は左右田の紹介で横浜商業学校の教壇に立った。受け持ちの授業は地理と世界史だった。が、教師生活は半年で終わった。徴兵検査で甲種合格になりすぐ入営となった。

幹部候補生を志願する者の多いなか、渡植は試験を故意に落第し、一年志願兵として渋谷の輜重<sup>しちよう</sup>兵隊に入隊した。思ったとおり、軍隊生活は野蛮で、不愉快きわまりないものであった。

唯一の愉しみは、本多との面会である。

大正十四年の春から母校の東京商科大学で教師の職を得た本多は月に一二回、渡植にあいに来た。かれが差し入れた菓子や弁当を一緒に食べながら、二人は多くのことを語りあった。

兵役をすませた渡植は、左右田が所長をしていた横浜社会問題研究所の研究員に迎えられた。研究所で刊行した論文集に、渡植はにわか勉強で書いた「ク

ローチェの「社会主義観」を載せた。本多等の勝れた論文に比べると、自他ともに認める駄作であった。恥じ入る気持ちでいたところ、さる著名な右翼思想家がこの論文集を批評し、渡植の論文だけを褒めたので、かれの論文はしばらく物笑いの種になったという。